

- (1) 単元名：場面の様子を想像して読む
- (2) 教材名：モチモチの木 齊藤隆介 (教育出版) 3年教材
- (3) 本時の目標：四の場面(前半)から、場面の様子や豆太の気持ちの変化を読み取ることができる。

【授業者より】

本単元は、2 学年合同にしてから3つめの物語教材です。前回の授業研で、「子ども達が二人で話し合う場面があるとよかった。」というアドバイスを頂いたので、今回は「児童と児童をつなぐ」ことを意識して、授業を展開したいと考えています。そのために、場面ごとにジャンプ課題として子どもに下ろす部分(テーマやキーワード)を決めて授業を進めてきました、課題は下ろすけど、教師の思いにひっぱられない。二人の考える力を信じて「待つ」というのが、今の私の課題です。

本時の場面は、豆太が劇的に変容する物語の山場です。児童が初発の感想を書いた時点で、豆太の変容をとらえることはできていました。この1時間で、より丁寧に言葉にふれ、友達と伝え合うことによって、一人で読んだ時よりも深く物語に浸ることができるように支援したいと思っています。

ご指導よろしくお願いします。

上の文章は、T先生がデザインシート下段の【授業者より】の段に書かれた文章をそのまま写させてもらいました。どうですか?・・・授業者の授業への誠意と熱意、子ども達への思い、伝わってきますね。

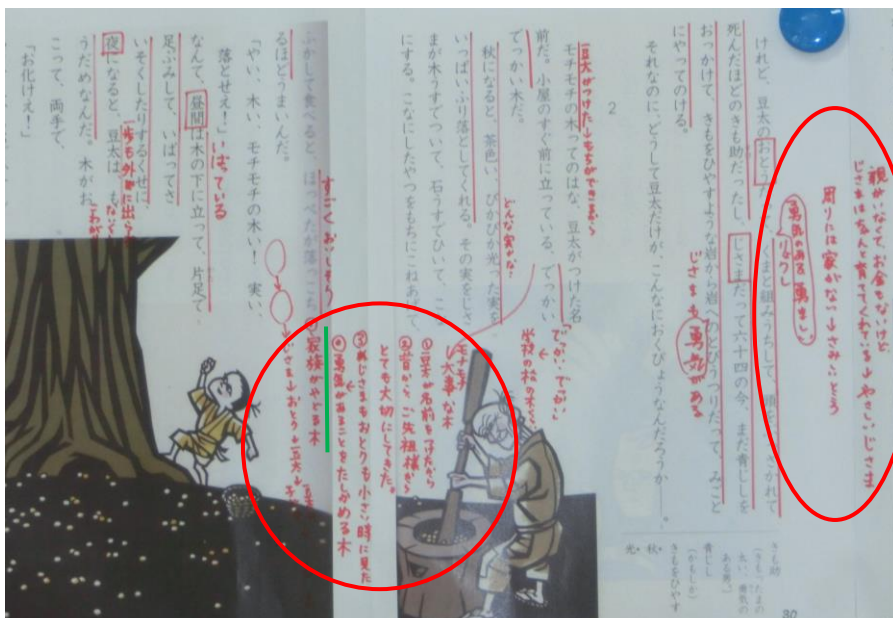
11月27日に、国頭村へき地教育研究会が安波小で予定されていて、本日は、その前に一度主事に授業を覗いていただけないかと?志願の授業研でした。前回のリフレクション。今度はこうしたい(心がけたい)。授業者のP-D-C-Aがひしひしと伝わる文章です。

7月の授業研では、授業者の授業ビデオをみんなで視聴し、アクションリサーチ型(ビデオ視聴による研究協議スタイル)の授業研究でリフレクションを進めてきました。協議会の中で、授業者の「わたしの方がドキドキ、ワクワクした。」と話した。あの言葉が印象的であった。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【余談】本時は(4)の場面であったが、大型教科書の(2)の場面の書き込みがあったので参照してみた。おとうもじさまも勇気のあるきも助だった。そんな父と祖父をもつ豆太は昼間はやんちゃっぽくいばっているが、夜になるとじさまのそばから離れきれない幼さがある。物語では、こわがりの豆太がじさまのために、勇気を出すというストーリーであるが、この教材が3年生であることに実に意味があると思う。



《?勝手な解釈?》

豆太の「こわさ」は、小学3年生にとっては、当たり前すぎるほどあたり前である。おそらく、このテキストを手にしたほとんどの子ども達が、日常の自分と重ねながら「実は僕も…」、「実はわたしも…」という「こわい」というモノへの自己の在り方について見つめる機会となる教材ではないだろうか。自分も「こわがり」の豆太と同じである。人として自分の弱さをさらけ出すという言葉は、なかなか話す機会や自分から話す気になれないテーマである。本音を語る「こわい」はみんな同じ。誰だって勇気がほしい。大好きな家族のためだったら僕だって勇気を出したい。教室の仲間達との「対話」からみんな同じである「安心」を共有したい。・・・これはあくまで、私の勝手な解釈である。

安波小の二人の書き込み(「読み」)を見てほしい。縛りのない自由な発想や思いが大切にされている。「親がいなくても」「家族がやどる木」など、現実、理想、感謝、憧れ。これからの僕達にほしいことばかりである。

【読む】9:55 (4)の場面を「読む」 各々音読 → 指名読み (計4回の読み)



読みは「味わう」である。僕なりの読みを味わうことが絶対である。「言葉にふれながら」僕なりに物語の情景や人情を「読み描く」である。二人とも自分の読みのペースを崩すことがない。翔太さんは明確な発音と音声で便乗感あふれる「読み」を描いている。良人は淡々と読み進める。何かを感じながら読んでいる。しっとり、したためるように読んでいる。

【書き込む】10:03 気づき、思い、疑問を書く



自由に書いている。決して教師が書いてほしいことを探して書いているのではない。僕の思いや考えが大切にされることが前提である。僕なりの読みが一番価値がある。

【教師も書く】授業者は、3人目の貴重な仲間でもある。子どもと一緒に教師も書き込む。ときどき顔をあげ様子をうかがう。互いの共通点や相違を探し、次の共有のテーマにしていく。この授業者の姿勢が「学び」を加速させ深めることになる。



【共有する】10:11 最初の共有である。「仲間がテキストをどう味わったか？」僕と同じところでも、感じ方や表現の言葉に違いが出てくる。だから共有する価値が生まれる。テキストそのものからの「学び」と仲間の「読み」からの「学び」が対話によって共有される。すべての「読み」や感性を受け入れてくれるので、「言い合い」にならない。「ちがう」読みでも相手を否定するのではなく「ぼくはこう思う」柔らかくしっとり、対話が交わされる。授業者は、前半部分の共有を翔太さんを中心にし、授業者と良人さんが疑問や



考えや付け足しをする形で進めた。授業者も三人目の仲間として語る一役をかう。三人の語り合うが、実にしっとり自然である。聴き合う。譲り合う。息遣いを感じる。他者からの「学び」が深まる。

10:22 互いの感性が交流する。二人の言葉を抜粋する。

良人：村まで・・・は、大変だったことを表している。

：おう、おう・・・は、優しく言っていることを表している。

翔太：豆太は3つの大変を乗り越えた。

「いたい」「さむい」「こわい」

：なぜ裸足で飛び出しちゃったんだらう。

授業者の「なぜ?」「どこから?」という問いにも、しっかり理由づけや考えの根拠を語る。素晴らしい!

10:35【授業者テーマを下ろす】

教師：このお話に「こわい」という言葉が何回も出てくるけど、どうということ?何でかな?二人で「お話してみて。」授業者はあえて二人での対話のきっかけをつくった。



P36の2つの「こわかった。」について交流する。

10:40 教師：聴かせてくれる。

翔太：最初の「こわい」は豆太の自分の「こわい」。

良人：2つ目の「こわい」はじさまが死んでしまうことへの「こわい」。

教師：なるほど、ありがとう。すっきりした。(感謝の言葉)

T先生、今日も素敵な授業ありがとうございました。

11月27日には、「ごんぎつね」ですね?片思いの代表文学作品です。先日の奥間小のM先生も(リフレクションシートNo.101)「ごんぎつね」でした。参考までに目を通してください。村瀬先生からのコメントもあります。

さて、「文学をいかに子ども達が味わったか?」わたしはよく最後の音読に出るということをお話してきました。今日の二人の終末の音読がまさにそれです。山を下ってお医者様を呼びに行く情景と豆太の様子。お医者様の背中におぶられてお医者さんをせかす豆太。テストやプリント等で書き示す表記より、明確にわかる「味わっている」ではないでしょうか。・・・教師と子どもの素敵な笑顔に感謝です。

